

ブック村だより

本学コレクション紹介 (21)

J.S.ミル『自伝』	森岡 邦泰(1)
本との出会い、自分との出会い	加藤 眞吾(2)
ぶっくす・なう	(4)
『叫びと祈り』	谷岡 一郎
『ピエタ』	塩田 眞典
『ゼミナール 現代経済入門』	佐和 良作
『フランス料理を築いた人びと』	下山 晃
学生選書スタッフ 2010年度活動報告	(6)
データベース活用講座①	(7)
インフォメーション・開館案内	(8)



本学コレクション紹介 (21) J.S.ミル『自伝』1873 ①

J.S.ミルの『自伝』には、父親から受けた英才教育が書かれているが、3歳からギリシャ語を習わされたというのは、常識を超えている。ある人は自伝から、ミルは歴史上の人物の中で知能指数最高(180)と算出したが、同時代人であれば、アイルランドの数学者・物理学者のハミルトンの方が上のような気がする。ハミルトンは幼い頃からギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語を操り、22歳で天文学教授になり、その後も四元数の発見、解析力学などに輝かしい業績を残しているからである。

それはともかく、ミルの受けた教育には素朴な疑問が否めない。8歳までに読まされた作品にヘロドトスを上げているが、「フェニキア人はイオを略奪してエジプトへ連れ去ったのではなく、イオはアルゴスで、例の船長と関係を結んでいたのだという。ところが女は、自分が妊娠したのを知ると、両親の手前を恥じ、自分のことが露見せぬようにと自ら進んでフェニキア人と同船し出奔したのだという」(『歴史』巻1、第6章)という内容を子供が理解できるだろうか。

(経済学部 准教授 森岡 邦泰)

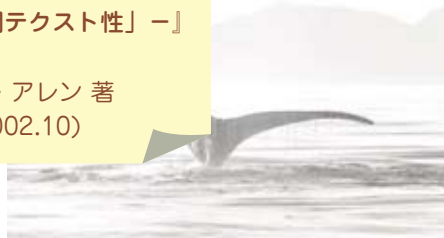
本との出会い、自分との出会い

経済学科 准教授 加藤 眞吾



『文学・文化研究の新展開 －「間テクスト性」－』

グレアム・アレン 著
研究社(2002.10)



グレアム・アレン『文学・文化研究の新展開－「間テクスト性」－』という本を読みました。何やら難しそうな題がついています。そもそも「間テクスト性」とは何でしょうか。英語の“Intertextuality”を訳したものだそうですが、聞き慣れない日本語ですね。しかし、この批評用語が意味するものは、実に興味深いものです。それは何かと言えば、文芸作品にオリジナルなものはないということ。すべての文学は結局、先行作品の焼き直しに過ぎないというのです。たとえば、ピノキオが鯨に飲み込まれてしまうエピソードは、皆さんよく覚えておられると思いますが、鯨に人が飲み込まれる話は古くは、旧約聖書の「ヨナ書」の中にあります。又メルヴィルの『白鯨』は、セルバンテスの『ドン・キホーテ』の焼き直しであるという意見があります。ピノキオの例はよいとして、どうして『白鯨』と『ドン・キホーテ』を同列に論じることができるのでしょうか。

まず各々の作品の主人公が立ち向かう相手のことを考えてみて下さい。そうです、それは大きな鯨と風車ですね。二人の主人公は共に「大きな敵（と二人が考えているもの）」に立ち向かってゆく訳ですが、人間の力では決して組み敷くことができないもの、たとえば運命や自然、神などに人が大真面目に立ち向かおうとすればするほど、その姿は滑稽に映るものです。エイハブ船長もドン・

キホーテもそのようなタイプの人物です。前者は悲劇的色彩が強く、後者は喜劇的色彩が強く出た作品ですが、骨組みは同じものです。ですから『白鯨』には『ドン・キホーテ』という先行作品があるとと言える訳です。テキストにオリジナルなものはない－これが「間テクスト性」という批評用語が意味するものなのです（と私は考えています）。そう言えば、芭蕉の有名な俳句「夏草や兵どもが夢の跡」の前には、杜甫の「國破山河在…」があります。わが国の「本歌取り」のことを思い起こして貰えば、この用語の意味が理解しやすくなるかも知れません。

この本の中では又興味深い人物が紹介されています。その名は、ジェラルド・ジュネット。文芸作品は、出版された当時の版で読まれなければならないというのが、ジュネットの主張で、いわゆる初版本とその後文学全集の中の一巻として、又文庫本として出版された版とは自ずとその作品のもつ意味が異なるという訳です。献辞、序文、図版(挿絵)の有無を初めとして、匿名か本名かという問題に加え、書籍のサイズ、活字や用紙の種類等が大きな意味をもつと考えるのです。話をわかりやすくするために、皆さんの好きな<音楽>に話を例えますと、歌手の写真や歌詞等を印刷したレコードジャケット付きのレコードをレコードプレーヤーにかけて聴く場合と、コンピューターで

配信されたものを「ウォークマン」で聴く場合と、たとえそれが同じ歌手の歌う同じ曲であっても、決して同じ曲であるとは言えないということになります。そんな馬鹿など皆さんは思われるかも知れません。同じ曲ではないかと。しかしジュネットによれば違うのです。これは不思議な話ですね。折りを見て何故だか考えてみてください。

ところでわたしたちは何故、本を読むのでしょうか。世の中は急速にペーパーレス化しつつあるように思えますが、その一方で大都市には大型書店が陸続と誕生していますし、大学の図書館もメディアセンターとして復活し、読書環境は益々充実しています。必要な情報はインターネットですぐに得られるのに何故わたしたちは、書店を見ると、ちょっと中を覗いて、本の頁をめくってみたい誘惑にかられるのでしょうか。皆さんが大学を卒業し、良き伴侶を得、やがて子供をおもちになると思います。子供ができると、その子の成長をある思いを抱いて熱心に眺めるものですが、その理由がある人は、わが子の成長を眺めることによって（決して見ることのできなかった）自分の成長してゆく様を迫体験しようとしているからだとしています。なるほど、そういう見方もできるのかと感心します。人は誰しも自分が成長してゆく姿を客観的に眺めることはできません。ひょっとしたら、本（ここでは小説のことを言っているのですが）を好んで読もうとする理由はその辺りにあるのかも知れません。わたしたちは、自ら歩めなかった人生を、歩もうとしてもその一歩が踏み出せなかった人生を物語の主人公の歩む人生に重ね合わせて、新たな人生を歩み直そうとしているのかも知れません。わたしたちは、主人公と苦楽を共にし、そして自らの人生に立ち返ります。小説を読むこと－それは自ら歩んできた人生の意味を再確認する行為といえるでしょう。

古書と呼ばれる種類の本があります。山本善行

『古本のことしか頭になかった』

山本善行 著
大散歩通信社(2010.8)



『古本のことしか頭になかった』は、古本をこよなく愛する筆者によって書かれた本ですが、ある本と出会った時の感激を次のように語っています。

また別のある日、『1Q84』（1984年）というジャズのカセットブックを手にしたときもうれしかった。ベヨトル工房と浅田彰、そしてアルトサックスの梅津和時、この組み合わせは何か期待できそうではないか。

今話題の村上氏の『1Q84』はもう読まれましたか。私はまだ読んでおりませんが、村上氏の新作の題名を聞いた時、すぐに思い浮かんだのが、ジョージ・オーウェルの『1984』でありました。この作品は冷戦時代にソヴィエトを意識して書かれた一種の未来小説ですが、村上氏の頭のどこかにこのオーウェルのことがあったのではないかなどとぼんやり考えておりました。しかし山本氏も指摘するように、ひょっとしたらこのカセットブックが一役買ったのかも知れません。読者の穿鑿（せんさく）をよそに作家はこの何でもないところから題名を拝借していた－このように想像することは愉快なことですが、事実は作家自身にしか語れないでしょう。古書は時にこのような思いがけない出会いを与えてくれます。

『叫びと祈り』

(東京創元社, 2010.2)
梓崎 優 著

世の中には凄い才能を持った物書きがいるものだ。この文章は逆立ちしても私には書けないな、という類の文章を書く作家に出会うのは、本の虫にとって嬉しい喜びですが、この姓名とも読み方の難しい作家、梓崎優（「よう」は誤植ではありません）もその1人。まだ20代とはとても思えぬ、妖気立ち込める独特の文章で人を話に魅き込む力を感じている。

このデビュー作品集（連作）は、5本の中（短）編から成っていますが、5作めで一応のつじつまが合うように組み合わせられています。ただし、各個独立した話と考えるのが自然です。5本の中でも冒頭の「砂漠を走る船の道」は、ミステリーズ新人賞受賞作品ですが秀作中の秀作。「凍れるルーシー」と並んで本書の看板的存在だと感じま

すが、本の題名が後半2作品から採られているように、どの作品も存在感あふれる内容です。ミステリー仕立てではありませんが、謎解きにこだわる必要はありません。異国情緒

あふれる（と言ってもオドロオドロしいのもあります）文化を知ることできます。できれば集中できる状態で、まずは読んで下さいな。次作が待ちどおしい新人作家に久々に出会いました。作品が出たら中味を読まずに2冊買う（一冊は保存用）作家は、今のところ20人ばかりおりますが、私のリストに1人加わったことをご報告申し上げます。

(学長 谷岡 一郎)



『ピエタ』

(ポプラ社, 2011.2)
大島 真寿美 著

作曲家ヴィヴァルディは司祭でもあり、ヴェネツィアの孤児養護施設（ピエタ）で音楽の指導を担っていた。楽才に恵まれた女子ばかりから成るピエタの合奏団のコンサートは当時この都市の呼び物であったらしく、思想家ルソーも旅行者として体験している。ヴィヴァルディの歴大な協奏曲群はこの合奏団のために作曲されたものであったらしい。

物語はヴィヴァルディのウィーンでの客死から始まる。語り手は彼のかつての弟子でいまはピエタの管理を担当している女性、その他登場人物は弟子の女流奏者、パトロンの貴族から高級娼婦、ゴンドリエーレと多彩である。もちろん陰の主人公は間接的にしか語られないヴィヴァルディその人であり彼の音楽である。話は紛失した楽譜を

巡ってミステリアスに展開され、その過程で彼の人となり、生き様があぶり出されて興味深い。多くの会話から成る文章はとても読みやすい。パステルカラー調の少し甘く感傷的な物語が軽快なテ

ンポで進行する。ヴィヴァルディの音楽に呼応した文体といえばよいのか。しかし決して浅薄にならないのは、18世紀、衰退期ヴェネツィアの政治・社会的背景がきっちり描き込まれ、結果、物語が絵空事ではなく立体的に歴史的リアリティーをもって迫ってくるから。音楽を巡っての話であるだけに、音楽通をも唸らせる記述がお終いの辺りに含まれていることを指摘しておく。

(経済学部 教授 塩田 真典)



『ゼミナール 現代経済入門』

(日本経済新聞出版社, 2011.2)

伊藤 元重 著

筆者はわが国の経済学者の中で第一人者とよく言われている。この書は、筆者がここ20年の間に、新聞や雑誌などに執筆した原稿を下敷きにして新たに書き下ろした現代経済の教科書である。しかし、教科書というより、現在のほとんどあらゆる分野の経済問題を取り扱った読み物といったほうがふさわしいかもしれない。数式はない。

ここ20年くらいの間に起きた様々な経済問題を経済理論に基づいて分かりやすく説明してくれている。経済を見る場合、筆者は「3つの目を持つ必要がある」といっている。第一は「鳥の目」、つまりマクロで経済を大きく見る目を持っていなければならない。世界のどこかで起きた問題が、わが国にも大きな影響を与えることがあることを見極める必要がある。第二は「虫の目」で、今度は

ミクロで経済を見る目が必要だという。大切なことを実現するには細部にもこだわるのが重要という意味である。第三の目は「魚の目」で、魚は海の中で潮の流れを読まなければ

ならない。経済にも潮の流れの変化がある。この潮の流れを見る目が魚の目である。

筆者はこれら3つの目、しかも高い視力を持った目で見ることによって、様々な経済問題を解き明かしている。これからの世界の経済の動きについても説得力を持って、教えてくれる。400ページを超える書であり、すべてを読みとおすには骨が折れるが、興味のある部分だけでも現代の経済を見るうえで大いに役立つであろう。

(経済学部 教授 佐和 良作)



『フランス料理を築いた人びと』

(中公文庫, 2004.4)

辻 静雄 著

料理店や居酒屋、ファストフードのチェーン店、喫茶店など、食べ物関係のお店でアルバイトをした経験のある人や、現にいま、アルバイトをしている人は多いだろう。コンビニで新発売されたお弁当やインスタントラーメン、チェーン店の手軽なハンバーガーなどを「ほんと、美味しいなあ」と楽しむ人も多いだろう。それも、アリ。アリではあるけど、一度、「大阪でホンマにいちばんうまいうどん屋はどこや? そこでバイトしてみようかな」とか、「今月のバイト代、実家への仕送り分以外は全部、超一流料理店で夕食に使ってみようかな」といったことも考えてみて欲しい。そして、本書のような、実践の裏付けをもった著者の、奥深い料理書の何冊かに目を通して見て欲しい。

この本は、自分のほんとうにしたいことは何かを

さがし求める者に、人との出会いがいかに大切か、不断の自己練磨・修練がいかに重要か、そして日本人として身のまわりの何でもなさそうなものや外国の文化とどのような関わり方を心がけ

ておけば良いか、を教えてくれる。何より、料理という日常茶飯の素材の中から、無限といえるほどの豊穡な生活のあり方や新しいものの見方がうまれてくることを、次々と教えてくれる。

この本に目を通したあとは、朝、昼、晩、三度の食事の中に、今まで自分自身で気づかなかった「とてつもない何か」が見えてくる、かも。歴史書、文明論、偉人伝、人生論として気軽に楽しめ、言うことナシ、の名著である。

(総合経営学部 教授 下山 晃)



学生選書スタッフ 2010年度活動報告

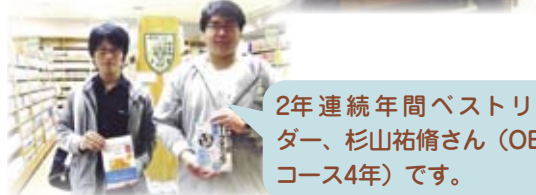
昨年度は従来の新刊カタログ選書・選書ツアーに加え、下半期に月1度の読書会を実施するなど、とくに活性化された1年となりました。

年間を通して、下記の活動をおこないました。

【選書ツアー】

学生選書ツアーは年2回実施しています。

昨年度は計11名の参加があり、のべ297冊が選書されました。



2年連続年間ベストリーダー、杉山祐脩さん（OBPコース4年）です。

選書図書は「学生選書コーナー」に並べられます。コーナーには常時500～600冊が配置され、スタッフのお薦めコメントも掲示されています。

昨年度の貸出冊数は約2,500冊で、一番の人気コーナーとなっています。

【交流会】

昨年度より、スタッフ間の親交を深めるべく「交流会」を実施しています。知的好奇心旺盛な人ばかりで色々な話がはずむなか、毎回図書館活動についても色々な意見が寄せられ、図書館ホームページ構成や資料の並べ方、防犯啓発のアイデアなどが実現されました。



【読書会】

選書スタッフ 阿部竜作さん（経済4年）の提案・司会進行により、昨年度11月に初めて実現しました。初回より、多方面で活躍中の多忙なスタッフ同士の顔合わせが奇跡的に実現し、いきなり『三国志』で盛り上がるなど、非常に活発な意見交換が行なわれました。

昨年度は計3回集まることができ、純文学からITベンチャー、ドキュメンタリー、美術集や啓発書など、1人1冊を紹介する予定が全員2冊ずつ持ち寄るなど、お互いが持つ世界を共有しあえる充実した会となりました。

～これまでに紹介された図書～

『三国志』全13巻 北方謙三 著

『累犯障害者』 山本謙司 著

『手にとるようにNLPがわかる本』 加藤聖竜 著

『就活のバカヤロー』 石渡嶺司, 大沢仁 著

『奇跡のリンゴ』 石川拓治 著

『僕が六本木に会社を作るまで』 田中良和 著

『頭のいい人が「脳のため」に毎日していること』

トッド・カシュダン 著

『NHKためしてガッテン決定版!』

『最強デジタル麻雀』 小倉孝 著

『「チーム脳」のつくり方』 清宮普美代 著

『サービス産業の構造とマーケティング』

南方建明, 酒井理 著

『鳥人計画』 東野圭吾 著

『海岸列車』 宮本輝 著

『フェイスブック若き天才の野望』

デビッド・カークバトリック 著

『インビジブル・エッジ』

マーク・ブラキシル, ラルフ・エッカート 著

『ナイフ』『十字架』 重松清 著

『事を成す:孫正義の新30年ビジョン』 井上篤夫 著

『グーグルGoogle:既存のビジネスを破壊する』

佐々木俊尚 著

『一億総ガキ社会:成熟拒否という病』 片田珠美 著

『フィッシュ・ストーリー』 伊坂幸太郎 著

『ルネ・マグリット』 マルセル・パケ 著

『20代からはじめるお金のこと』 松真理子 著

なお、積極的に活動頂いた向井雅典さんの卒業にあたり、送別会が開かれました。各スタッフからは『白い本』（持主が書きこむ無地の本）『ビタミンF』（重松清著）、お手製ブックカバー、『三国志』フィギュア(1)、ブックスタンドが贈られました。向井さん、図書館活動へのご協力ありがとうございました！

データベース活用講座①

課題やレポートに必要な調べ物に威力を発揮する「データベース」。キーワードを入力すれば必要な情報を入手できるのは検索エンジンも同じですが、企業や研究機関、図書館のような学術機関などで契約しているデータベースからは、信頼のおけるデータを手に入れることができます。

今回は、当館のホームページから利用できるデータベースについてご紹介します。

「大阪商業大学図書館」ホームページ
<http://www.lib.daishodai.ac.jp/>



トップページ「本学資料検索」より「契約データベース」をクリックすると、データベース一覧が表示されます。



先頭に用途別のデータベース一覧が表示されます。今回はその中のいくつかをご紹介します。

◎複数の情報源を横断検索する
「Japanナレッジ プラス」



百科事典・人名辞典・国語辞典・外国語辞典などの各種事辞典や、ニュースサイト、「日本の論点」「週刊エコノミスト」等の記事やコラムを横断検索できます。同時に外部サイトも検索できます。また「東洋文庫」や「日本古典文学全集」などの叢書も本文を閲覧できます。

↓キーワード検索結果をクリックすると解説とともに「関連語句」へのリンクが表示され、より理解を深めることができます。



「週刊エコノミスト」などの記事のみを検索すると、「記事一覧」から各記事の「抄録」を閲覧できます。探しているテーマに沿って手早くピックアップすることができます。



実際に使用している大学教授や小説家などの方々の「活用法」も紹介されています。

次回は「日経テレコン21」について、活用法をご紹介します。

図書館インフォメーション

◆特設コーナー『新生活応援フェア』ご利用ください！

新入生のみなさん、また新たに一人暮らしを始める人や就職をひかえた方々にお薦めする本を、特設コーナーに集めました。初心者向けレシピや片付け術、勉強のコツなど、幅広く集めています。図書館2F、201書架に展示しています。この機会に、一度のぞいてみてはいかがでしょうかでしょう。(利用好調のため、貸出中の場合はご容赦下さい。)

◆2010年度「ベストリーダー」発表！

利用者のベストリーダーは昨年に引き続き、学生選書スタッフ 杉山 祐脩さん（OBPコース4年）でした！ベストリーダー資料は下記のとおりです。

- 第1位 もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら / 岩崎夏海著 (ダイヤモンド社, 2009.12)
- 第2位 都市経済学の基礎 / 佐々木公明, 文世一著 (有斐閣, 2000.5.)
アバター / 山田悠介著 (角川書店, 2009.11)
- 第3位 TOEIC TEST英単語スピードマスター / 成重寿著 (Jリサーチ出版, 2004.4)
悪人 / 吉田修一著 (朝日新聞社, 2007.4)
1Q84 (ichi-kew-hachi-yon) / 村上春樹著; book 1 (新潮社, 2009.5)

◆平成22年度下半期に寄贈された本学教員著書は下記の通りです。(50音順 敬称略)

※配架場所は「本学教員著書コーナー」です。貸出もできます。

- 【迫 俊道】『芸道におけるフロー体験』溪水社, 2010.11.
- 【佐野 茂】『一家団欒と家庭の教育力：聞き書き調査にみる戦前・戦後の変容』関西学院大学出版会, 2010.11.
- 【中津 孝司】『中東問題の盲点を突く』創成社, 2011.1.
『資源危機サバイバル：日本は勝者になれるのか?』創成社, 2010.8.
『アルバニア現代史』晃洋書房, 1991.11.
『グローバル・トレンド：世界経済の新潮流』晃洋書房, 1989.12.
『北ヨーロッパ現代史』晃洋書房, 1989.9.
『アルバニア語入門』泰流社, 1989.3.
- 【西村多嘉子】『法と消費者』慶応義塾大学出版会, 2010.9.
『市場と消費の政治経済学』法律文化社, 2010.8.
- 【前田 啓一】『産業集積の再生と中小企業』世界思想社, 2003.7.
『多様化する中小企業ネットワーク』ナカニシヤ出版, 2005.8.

開館案内

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

●は休館日です。

上記以外にも臨時休館日を設定場合があります。

開館日程および時間の変更されることがあります。

詳細は学内掲示・モニター・ホームページ等でお知らせ致します。

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第38号

平成23年5月31日発行

大阪商業大学図書館

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

電話 (06) 6781-5280

FAX (06) 6781-0089

e-mail: lib@oucow.daishodai.ac.jp

ホームページアドレス: <http://www.lib.daishodai.ac.jp>

ISSN 1346-8928